

7 保健体育

身近な情報を活用した，思考力を高める保健体育学習 —スポーツに対する再発見に向けた探究的学習活動を通して—

若宮 隆洋

本論の要旨

2021年から実施となる学習指導要領において，保健体育科ではオリンピック・パラリンピックに関連したフェアなプレイを大切にするなどスポーツの意義の理解が改訂のポイントとして挙げられている。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて，これまでも様々なニュースなどの情報がメディアを中心に発信されてきている。多くの情報の中から，生徒自身が的確に情報に対して向き合い，取捨選択するための力が重要であると考え。

そこで，保健体育科の学びにおいて，スポーツの必要性や意義，効果，多様な関わり方，学び方を知った上で様々な情報に向きあい，実際に運動やスポーツを行えるような学習が必要不可欠であると考え。仲間との探究的学習活動を通して共に学び合い，助け合っていくことはスポーツを行う際にも重要な要素であり，仲間がいることで学習の楽しさや喜びは深いものになるであろう。私たちの生活にとってかけがえのない文化であるスポーツへの学習を通して，さらなる学習の高まりを起こしたいと考える。

キーワード スポーツ，情報，メディア，探究的学習活動，仲間

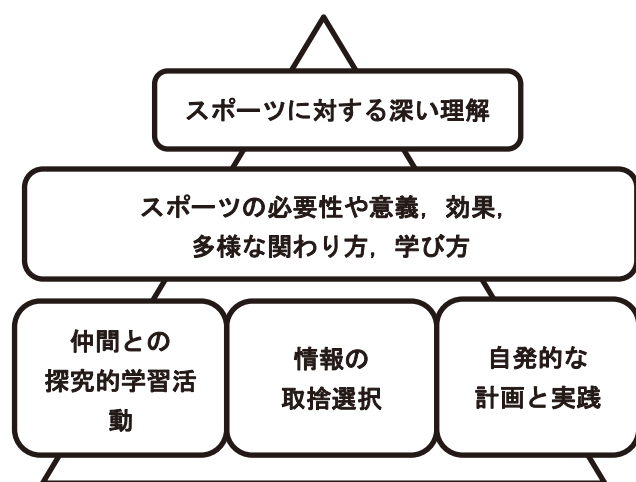


図1 本研究のイメージ

1. はじめに

日本では，スポーツに関する情報は，テレビや雑誌，インターネットなどで数多く取り扱われている。学校現場でも，保健体育や部活動などスポーツに触れる機会は多く，生徒たちにとっても，もはや生活の一部となっている。そのようなスポーツについて，生徒たちが再認識することで，さまざまな要因を加味し，状況を分析・判断し，自らの考察から答えを選択し実行して，生活体験や生活実践と様々な情報や学習内容が相互に深く結びつき，生徒たちの思考力や判断力を高めるために，広い視野をもって学習に取り組むことが出来ると考えられる。

このように，多様な情報がある中から，生徒が分

析・判断し，自らの実践に繋げる力は重要である。身近なスポーツを学習教材として取り扱い，分析・判断，実践・実行し，結果を評価することで，疑問点や課題点も見つけやすく，探究的な学習に迫りやすいと考える。

本年度，本校の研究テーマである「探究的学習活動を通して，論理的・創造的な思考力の向上」とも関連させ，本校が全教科で取り組んでいる思考ツールの活用を通して，目標・目的の設定や要因の整理・分析といった黒板の板書や説明だけの授業ではイメージしにくい部分が明確になる。その上で他者と考えを共有させ，そうすることで実践や評価，改善の場面においても，生徒同士が互いに学び合える場面にも繋がっていくことが期待される。

2. 研究仮説

本研究では，体育分野の体育理論において，スポーツへの様々な関わり方について，分析を行う。ここでは，生徒自らの実体験が大きな影響を及ぼすと考えられる。その中で運動・スポーツに対して持っている最も強いイメージと言えば，運動は「する」ものであるというものだろう。そのイメージを「観る」もの，「応援する」もの，「支える」もの，「調べる」ものなどの様々なイメージを提示することで，身近な運動・スポーツに関する情報，またそれらに関する正しい知識から分析・判断を行うことができ

ると考える。さらに正確に、また多角的に行えば、自らのこれからのスポーツライフに影響を与え、学習と生活を結びつけることが可能ではないかと考える。

3. 授業実践(平成29年6月21日 第1学年)

(1) 単元

スポーツの多様性

(2) 単元設定の理由

中学生にとって、スポーツとは「する(play)」ものとしてとらえている生徒が多く、スポーツが持つ多様性について気付いていない。スポーツは私たちの生活や人生を豊かにするかけがえのない文化である。スポーツの必要性や意義、効果、多様な関わり方、学び方を知ったうえで行えば、スポーツの楽しさはより豊かになり、より楽しい行い方も発見することができる。また、仲間とともに学び合い、助け合って行えば、スポーツライフはさらに深いものになる。

1年生の生徒たちは、スポーツといえば部活動などや体育の時間、休み時間に行うものとして捉えており、スポーツに関心をもって見ることや、応援すること、またスポーツに携わる職業などといったことがスポーツに結びついていない。つまり「スポーツ＝運動すること」と捉えている。

生徒の豊かなスポーツライフの実現に向けて、多くの情報に対して関心を高め、整理し分析するため、思考ツールなどを活用し、スポーツの本質に迫るとともに、これからの人生において、進路を決定する場面、また健康について考える場面、また仲間とのコミュニケーションを深める場面、といった様々な場面において自分自身で判断し、行動できる力を身につけさせたい。

(3) 単元の学習目標

スポーツ＝「する(play)もの」という価値観からさらに発展させ、生徒自身のこれからの人生におけるスポーツへの意識を高めるために、また健康の保持増進のためにスポーツと関われる態度を養う。

(4) 単元の評価基準

【関心・意欲・態度】

スポーツに対して関心を持ち、スポーツの多様性に気づき、関心をもって授業に臨んでいる。

【思考・判断】

スポーツに関する多くの情報を、整理・判断し、その考察や意見を条件に合わせて論述している。

【技能】

身近なスポーツに関する情報を、思考ツールを活用し、整理できる。

【知識・理解】

スポーツの持つ多様な要素を理解している。

(5) 単元の学習計画(全3時間)

第1時：スポーツの始まりと発展

第2時：スポーツの多様な関わり方

第3時：スポーツの学び方

(6) 校内研究と本時との関連

(論理的思考を促す具体的な方策)

【学習課題設定の工夫】

① 学習者に関わるもの(判断)

・生徒の思考を深めさせるために、観察の視点を明確化する。

② 指導方法に関わるもの(ゆさぶり)

・生徒の視点の切りかえを促す発問や言葉がけなどを通して、思考をゆさぶる。

【思考ツール等の活用】

・スポーツへのさまざまな関わり方について、フラワーチャートで分類、整理し共通点や相違点を見つける。

(7) 本時の目標

スポーツへの様々な関わり方を知るとともに、これからの人生でどのようにスポーツに関わっていきたいか考える。

(8) 資料・教具・準備など

- ・教科書
- ・学習ノート
- ・フラワーチャート
- ・付箋
- ・プロジェクター
- ・実物投影機

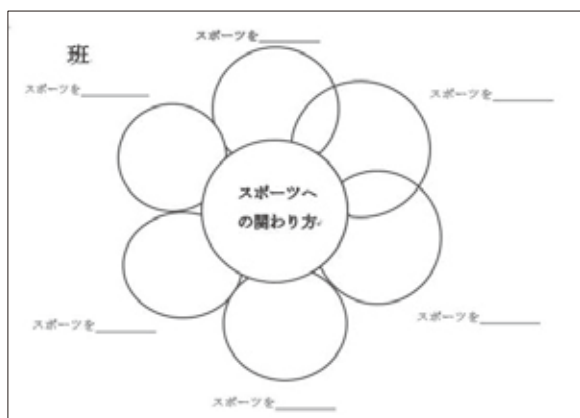
(9) 本時の学習過程 (第2時)

	学習内容・学習活動	○指導上の留意点, ★思・判・表を伸ばす方策, ◆評価
導 入	1. スポーツの語源を考える。	★数名に発現させ, スポーツの印象を確認する。
学習課題: スポーツへのいろいろな関わり方について整理しよう		
展 開	2. スポーツの持つ多様性を, 実際の関わり方から考える。 ・スポーツへの関わり方について, 具体例をもとに考える。 ・グループでスポーツの関わり方について整理する。 ・関わり方の共通点を探る。 3. グループの整理した結果を発表する。 ・他のグループの発表を聞き, 自分たちのグループと比較する。 4. 本時の学習課題について板書し確認する。 ・「する」スポーツ以外に「見る」「調べる」「支える」「伝える」「職業」などのスポーツ多様性を確認する。 5. 具体的に将来どのような関わり方をしてみたいか考える。 ・2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて考える。	★ICTでスポーツの場面の写真を提示し確認させる。 ○課題のフラワーチャートを用いて, 付箋を使用し整理させる。 ○4人グループで課題について整理し交流させる。 ◆(グループでの交流) 【関心・意欲・態度】 ◆(ワークシートのフラワーチャートの記入) 【技能】 ○整理したフラワーチャートを使い, 発表させる。 ★各グループの意見を拡大投影機で, 拡大提示して発表をわかりやすくする。 ★他のグループのまとめと自分のグループのまとめを比較させ, 論理的な発表を促す。 ○スポーツの多様性をまとめ, 板書する。 ★これまでの学習から, その理由と共に論述する。 ◆(論述) 【思考・判断】
ま と め	6. 本時のまとめをする。	○スポーツに対する視野を広げ, これからの人生におけるスポーツへの意識を高めるために, また健康の保持増進のためにスポーツと関わる態度を養う。

(11) 授業実践の考察

今回、スポーツの多様性について、スポーツへの多様な関わり方について取り上げ、授業を進めた。生徒たちにとってスポーツは部活動で運動部に所属していたり、地域のスポーツクラブに所属していたり、また、バレエなどレッスンを受けていたり、「する」ことがスポーツと捉えている生徒が多く、それ以外の関わり方がイメージしにくいように感じられた。そこで、今回思考ツールとしてフラワーチャート（資料 1）を活用し、「する」こと以外の関わり方について情報を分析し、整理を行った。

この分析をすることに当たって、生徒たちに分類項目を挙げさせることもできるのではないかと考えられたが、今回はスポーツのいろいろな関わり方を整理することを第 1 の目標と設定したため、教員が提示する形を取った。今回の分類項目は「スポーツを行う」「スポーツを見る」「スポーツを調べる」「スポーツを伝える」「スポーツを支える」「スポーツを仕事にする」といった 6 つに分類し、しかし、それぞれの項目の共通する部分にはベン図を用いた。



資料 1 思考ツール（フラワーチャート）

そして、探究的な学習活動として、4 人グループで思考ツールを使い、視覚的に情報を整理し分析を行った。今回いきなり分類することを学習活動の中心に据えたためか、スポーツに対するイメージがまとまらず、整理することに戸惑っているグループが多く見られた。改善点としては、スポーツに対するイメージをイメージマップや K J 法などを活用してまとめ、そこで出てきたイメージを今回のフラワーチャートに当てはめていくことで、分類しやすく、また、共通点も見つけやすくなったのではないかと考える。思考ツールを系統立てて活用することで、生徒の考えもより整理され、グループでの対話的な学習活動や分析に、より効果的な視覚教材として役



立てることができたのではないかと痛感している。

資料 2 グループ活動

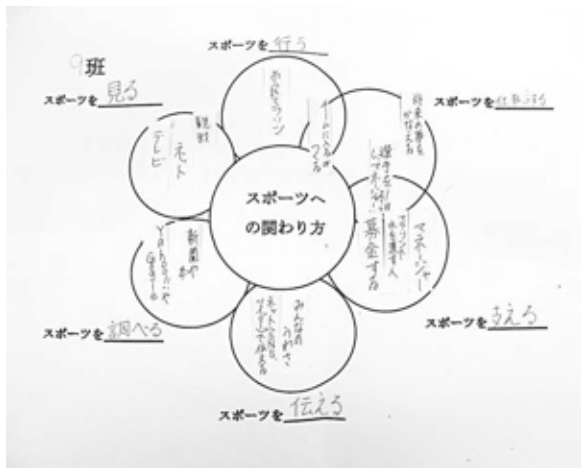
グループ学習では、付箋をフラワーチャートに貼ったり、動かしたりしながら整理した。（資料 2）グループによってはとにかくたくさんの付箋を使い、スポーツに対するあふれるイメージを書き連ねているグループや、フラワーチャートということで、花のように整理するグループ、また、貼り付けるスペースが狭かったため、じっくりと話し合いをして、意見をまとめ、整理してチャートに付箋を貼り付けるグループと様々であった。（資料 3）（資料 4）



資料 3 グループでまとめたチャート①

特に上手く整理できていたグループ（資料 4）は、それぞれの分類項目に加え「スポーツを仕事にする」と「スポーツを支える」という項目の共通するイメージもわかりやすくまとめられ、教員が求めていた生徒の気づきが見られるものであった。

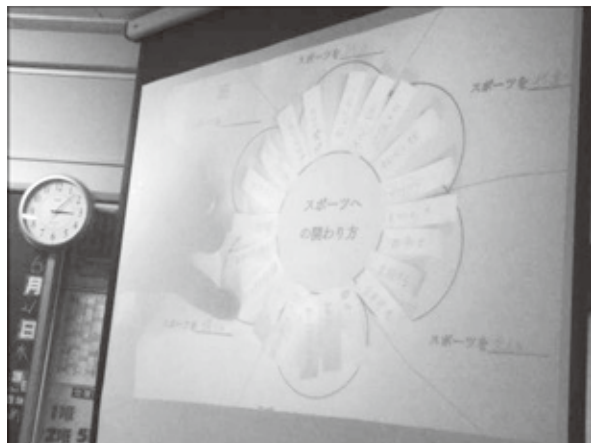
そして、これらの 10 のグループの分析・整理を共有するために実物投影機を使用し、生徒の思考の整理に役立てた。そこではグループの発表者にフラワーチャートの説明とグループでの話し合い活動の経過の説明を求めると共に、教員から質問を投げかけた。



資料4 グループでまとめたチャート②

各グループの発表を見てみると、どの分類項目にも同じくらいイメージの付箋が貼り付けられていたが、「スポーツを行う」イメージよりも、「スポーツを支える」または「スポーツを調べる」といった分類項目がやや多いようにも感じた。この点からもスポーツを「するもの (play するもの)」といったイメージから、視野を広げることができたのではないかと推察される。

このように身近な場面で接する機会の多い情報に対して、新たな気づきを生徒に与えることができたことで、授業のねらいの達成に近づけたと考える。



資料5 実物投影機を活用した発表

4. 成果と課題

本研究は、次期学習指導要領において保健体育科ではオリンピック・パラリンピックに関連したフェアなプレイを大切にするなどスポーツの意義の理解が改訂のポイントとして挙げられていることから、スポーツを教材として扱い、探究的な学習活動の展開について行った。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け、様々な情報がメディアを中心に発信されてきている。これらの多くの情報の中から、

生徒自身が的確に情報に対して向き合い、取捨選択するための力が重要であることは強く感じてきた。

また、保健体育科において、スポーツの必要性や意義、効果、多様な関わり方、学び方を知った上で様々な情報に向きあい、実際に運動やスポーツを行えるような学習は必要不可欠であり、仲間との探究的学習活動を通して、共に学び合い、助け合っていくことはスポーツを行う際にも重要な要素であり、仲間がいることで学習の楽しさや喜びは深いものになるだろう。そして、そのようなスポーツへの関わり方は体育分野だけでなく、健康面への意識、つまり保健分野の学習内容にも通ずるところとなり、生涯を通して健康の保持増進を進めていくためには、生徒たちのこれからの人生の中で、自らの健康のために重要だと考えられる。

私たちの生活にとってかけがえのない文化であるスポーツへの学習を通して、さらなる学習の高まりを起こしたい。

この生徒たちの身近な日常の生活の中でのスポーツだが、地域社会では様々なスポーツが展開されている。それらのスポーツは、基本的には個人的な欲求や動機づけをベースとしながら、地域社会に対する社会的・経済的・個人的効果を期待され、地域活性化という視点で捉えられるスポーツもある。

【例】

- ・東京オリンピック・・・スポーツの振興，地域社会のさらなる発展（社会的・経済的効果）
- ・総合型地域スポーツクラブ・・・地域住民の交流，コミュニティの再生（社会的効果）
- ・スポーツイベント・・・地域のPR効果，スポーツ交流人口の増加（経済的・社会的効果）
- ・地方自治体・・・地域生活の支援，医療費の削減（個人的・経済的効果）

また、地域社会におけるスポーツの種類と動向として、「する」「見る」「支える」と「個人レベル」「地域社会レベル」などに分類される。楽しみや健康のために行う個人的・同好的スポーツ、メディアなどを通してスポーツを楽しむ情報としてのスポーツ、スポーツ応援や部活動のマネージャーなどの個人的・同好的サポーター、スポーツ活動を通しての地域社会形成が期待されるコミュニティスポーツ、高校野球やJリーグ、日本代表などスポーツ観戦を通して地域社会の連帯感や統一感を醸成するシンボルとしてのスポーツ、スポーツイベントやクラブの運営・指導に携わるスポーツボランティアといった、「する」「見る」「支える」と「個人レベル」「地

域社会レベル」との関連による分類である。

また、地域スポーツの近年の特徴的な動向として、成人のスポーツ実施率の飛躍的な上昇やメディアを通しての高いスポーツ観戦率と低い直接スポーツ観戦率、1割にも満たないスポーツボランティアの参加者などが挙げられる。

これらの多くの情報、例えばテレビや雑誌、インターネットなど様々な形で取り上げられているスポーツについての情報をいかに活用するか。また、保健体育において、それらの情報を活用し、生徒の思考力・判断力・表現力を高めることを中心に進めた。

スポーツに関する内容は、現在だけでなく将来の生活に大きな影響を与えるものであると考える。今すぐ自分自身にとって重要でないと思われる内容についても、未来を予測し、そのような場面において、生徒たちがいろいろな要因を加味し、状況を分析・判断し、自らの考察から答えを選択し実行していくために必要不可欠な内容である。

また、生活体験や生活実践と、様々な情報や学習内容を相互に深く結びつかせるために、より効果的な情報分析するための思考ツールの活用とそれにつながる適切な判断力、そしてその判断による行動の変容が学習の場面で見られることが必要であると考えられる。



資料6 授業の様子

課題点は、今回はスポーツという生徒たちにとっても身近な、興味・関心を持ちやすい内容を取り扱い、生徒たちに情報分析や整理を行う授業展開を進めたが、生徒個人のスポーツに対する興味・関心の差が大きく、普段の経験の違いによって、グループでの取り組みの進度に大きな違いが出てしまったことである。生徒たちの経験に、グループ活動の中心的部分を頼った結果、思考の深まりや気づき、発見、再確認といった部分により迫ることができなかったように生徒の様子からうかがえた。この点は大

きな反省点である。先述したように、思考ツールを系統立てて活用することで、より焦点化した整理と分析ができたのではないかと考える。また、整理と分析のための適切な時間と量と質を確保できなかったことも反省点である。

近年重要視されている情報活用能力の育成のためにも今回の課題を是非これからの研究に活かしていきたい。

次年度は授業展開の時間を見直し、実生活に即した情報を生徒たちにイメージしやすく発信するとともに、他の教科内容とも関連させ教科横断的な学習を進めたい。また、同じく本校の他の教科で多く取り扱われている思考ツールとICTなども取り入れて活用し、生徒の発想力や判断力を膨らませ、正しい情報をしっかりと整理できる学びあいの場を設定したい。

生徒自身が自らの生活について意識し、学習と生活を結びつけ、学びを進めていくことは、多くの場面で必要とされている「生きる力」を育む資質・能力の育成の観点からも重要である。保健体育科がその一翼を担えるような充実した授業で実践していくことがこれからの課題であり、保健体育科教員の使命であると改めて感じ、これからの研究に取り組んでいきたい。

参考文献・資料

- ・田村学・黒上晴夫「こうすれば考える力がつく！ 中学校思考ツール」小学館, 2014
- ・滋賀大学教育学部附属中学校「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要第58集」, 2015
- ・文部科学省「『生きる力』を育む中学校保健体育教育の手引き」, 2014
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育編」, 2008
- ・井上俊・菊幸一「よくわかるスポーツ文化論」ミネルバ書房, 2012